

「学力低下」という問題から思うこと

センター協力研究員（市川市教育センター指導主事） 津 田 薫

私は、教育センターの教育相談室という場で不登校の子どもたちとの問題と向かい合っている者です。

13万人とも言われている（グレーゾーンを入れたら何十万、いや100万人近いかもしれない？）この子どもたちの「学力」は「学力低下」の問題に入っているのだろうか、と考えたことがあります。社会がどれだけこの子ども達の「学力」保証に真剣になっているのか、と考えたことがあるわけです。そういう問いの立て方もあると思います。

「学力低下」の問題は危機として捉えられているはずですが。しかし、問題からどういう問いを立てるか、は必ずしも同じではないはずです。

このプロジェクトに参加してお聞きした話やいろいろな報道から感じるのは、勉強への情熱が大人も子どもも冷めてきているのだなということです。問題だと素直に思うと同時に、勉強が生きていく上でのエンジンの役をうまく果たせなくなっているのもわかるのです。

それではいけないと問題を感じる方が「学力低下」という危機感を発表し、それが広く行き渡る。空気というか、風潮というか、学力低下だ、どうしよう、という声はあつという間に教育界の問いとして成り立ったかのような現在。しかし…とふとすることがあります。

誰かから与えられた問題や危機感は、それだけでは声の大きさの割には切実感が伴わないのです。危機感は押しつけられなくとも持っていました。なのに、自分たちからではないところから新たな問題として「危機感」がやってきてしまったかのような印象が、しかし…とふと思わせるのです。

以前にもこのレポートで書かせていただいたのですが、今、主に大学から声が挙がっている学力低下の問題が問うていることは、私達小・中学校の教員の間ではもう10年くらい前から存在し始めていました。新しいようで古い問題なのです。

それがようやく大学にまでやってきたのかという感覚があります。大学が声を発し、問題は世に広まりました。ですが、この学力低下という危機感、その風潮にただ振り回される前に、私は、私達小・中学校の現場がここ10

年の間に徐々に感じてきた学習と子どもにまつわる問題を、自分なりに見極めたいと考えます。何が問題で何が必要か、という問いも解決プランも自分なりに一度立てて見たく思います。そういう問い立てと解決プランの立案を試みてみる教員からの動きを、認め絡め広めていくネットワークが必要だと思うのですが、現状はどうでしょうか。

「今これを考えるべきだ、そして、解決策はたぶんこれだ」。与えられた問いは良い問いとなることもあります。自分の問いとはならないこともあるのに、今は問いも解決プランも同時に急に突きつけられているかの感があります。

総合的学習だ、選択授業だ、パソコンだ、英語だ、生徒指導だ、教育相談だ、生徒理解だ、学校は地域には開くのだ…。

それらの述べ方は、確かに今の時代必要な述べ方かもしれませんが、教員が全て抱えられえることだと、誰が本気で思っているのでしょうか。

この問題で私が一番関心をもっていることは、非常に単純で皆思っているであろうことです。

それは、教員の教授力を教員が自信を持って見直し、教員は教えていいと言い切ることにについてです。その時、強制（教え込み、一方通行の講義式）か子どもの発想（動き）待ちかというような二極を対立させる不毛の論戦はもうやめて、教授する場を楽しく作りこむ教員の姿が子どもに与える影響力について考えていくということです。そして、その現実を支えるために、教員の仕事を限定し、考える時間の確保のために学校スタッフの人数の確保をしていく。こういう施策と予算措置をとって実際に活動してから、もう一度「平成の学低下力問題」を問題にしてみたとき何が見えてくるか、と想像すると、実は、現実の問題がよくよく見えてくる、と思うのです。

あしかけ4年間、このプロジェクトに参加させていだき、とても勉強になりました。教員としての私自身を見つめる示唆もたくさんいただきました。ありがとうございました。